



ムハンマド皇太子と 「1979年以前のサウジアラビア」

東京大学 先端科学技術研究センター 准教授 池内 恵

1. サウジの国家改造プランと「1979年」

サウジアラビアは大きな変動期にある。サルマーン国王の元で、若いムハンマド皇太子への権限の集中が進み、大規模な国家改造・改革プランの見取り図として「ヴィジョン2030」が提唱されている。サウジアラビアは、「ヴィジョン2030」で示された国家と社会・経済の大転換を、達成することができるのだろうか。サウジの改革の帰趨は、サウジアラビア一国の将来に関わるだけでなく、中東地域の国際政治の構造や方向性も決定しかねない、重大な課題である。

サウジアラビアの改革の成否を分ける重要な鍵として、社会・文化面での改革、特に宗教の解釈と実践において、大きな変革が可能か、それが社会に広く受け入れられるか、という問題がある。「ヴィジョン2030」の経済改革は、女性の社会参加の推進や、外国の異なる宗教や世俗主義の許容など、宗教に深く関わった、文化と社会規範の次元での大幅な変化を伴わなければ、達成されにくいと考えられる。

しかし、スンナ派、特にワッハーブ派の厳格な解釈が適用・実践されていることで知られるサウジアラビアに、突如として寛容で開明的な宗教解釈が育ち、受け入れられるのだろうか。これは専門家の間でも議論が分かれる問いである。サウジアラビアでは、建国以来、スンニ派、その中でも厳格なワッハーブ派の勢力が権限や影響力を保持してきたことが知られている。サウジアラビアは中東諸国、イスラーム諸国の中でも、男女隔離といったイスラーム教の規範を、厳密に実行してきた。ムハンマド皇太子の指揮の下で、これを一気に覆すような改革を実施することが、はたして可能なのだろうか、そのような改革は社会に大きな反発なく受け入れられるのだろうか、という問いは、サウジアラビアの経済改革の成否に関する重要な問いである。

サウジアラビアの社会・文化面での改革、特に宗教面での改革の実行可能性を検討していく上で、重要な概念が「1979年以前のサウジアラビア」である。この概念は昨年10月以来、サウジアラビアの為政者自身、すなわちムハンマド皇太子自身の口から、繰り返し提起されており、サウジアラビア傘下のメディアや、ニューヨーク・タイムズ紙のコラムニストのトマス・フリードマン氏によって、急速に広められている。これは端的には、サ

ウジアラビアの宗教解釈と実践は、1979年以前は穏健であった、とする議論である。

1979年は、中東の歴史を転換させる重大な出来事が相次いだ年であった。次の4つが中でも重要なものとして記憶されている。

- (1)イラン革命
- (2)メッカのアル＝ハラーム・モスク占拠事件
- (3)ソ連のアフガニスタン侵攻
- (4)エジプトとイスラエルのキャンプデービッド合意

1979年に、イラン革命が勃発してシーア派の革命思想が広まったことと、ワッハーブ派の過激派によるメッカのアル＝ハラーム・モスク占拠事件が発生した。対抗上、サウジの宗教政策、社会・文化政策が保守化したことが、1979年以後のサウジアラビアの宗教解釈・実践の厳格化あるいは過激化を促進したとするのが、「1979年以前のサウジアラビア」をめぐる近年の議論である。ソ連のアフガニスタン侵攻に対抗してジハード戦士を動員したことも、過激な解釈を加速したとされる。「1979年以前のサウジアラビア」をめぐる最近の議論は、「1979年以前に戻る」ことによって、1979年以前の、外から強いられた「不本意な」過激化の流れをリセットすることで、想像されるよりも容易に、サウジアラビアの宗教改革が可能になるという主張を含意している。それは「ヴィジョン2030」の実現可能性を論証するための重要な論点となっている。

「1979年以前のサウジアラビア」という概念は、どのようにして提示され、広められてきたのだろうか。1979年以前と以後でサウジアラビアの歴史を確然と分け、1979年以後の展開をもっぱら1979年に生じた出来事の結果としてとらえ、そこに責任を帰する議論は、どの程度歴史事実を反映しているのだろうか。本稿では、まずムハンマド皇太子が「1979年以前のサウジアラビア」への回帰を主張した、公的な発言を特定し、主要部分を訳出して、議論の構成要素と政治的含意を明らかにする。そして、ムハンマド皇太子による「1979年以前のサウジアラビア」論への賛否の双方の議論を、アラブ世界のメディアによる報道と、欧米の主要メディア上での有力論客の寄稿から見ていく。特に『ニューヨーク・タイムズ』紙のコラムニストであるトマス・フリードマンが、ムハンマド皇太子の発信する言説を広める、あるいはそもそもムハンマド皇太子の肯定的イメージを形成する過程で果たす役割に着目する。

筆者紹介

1996年、東京大学文学部イスラム学科卒。アジア経済研究所研究員、国際日本文化研究センター准教授を経て、2008年10月より現職。ウッドロー・ウィルソン国際学術センター客員研究員、ケンブリッジ大学客員フェロー、アレクサンドリア大学客員教授などを兼任した。中東地域研究、イスラーム政治思想を専門とする。主要著作に『現代アラブの社会思想—終末論とイスラーム主義』（講談社、大佛次郎論壇賞）、『アラブ政治の今を読む』（中央公論新社）、『書物の運命』（文藝春秋、毎日書評賞）、『イスラーム世界の論じ方』（中央公論新社、サントリー学芸賞）、『中東危機の震源を読む』（新潮社）、『イスラーム国の衝撃』（文藝春秋、毎日出版文化賞・特別賞）。最新の著作は『増補新版 イスラーム世界の論じ方』（中央公論新社）、『サイクス＝ピコ協定 百年の呪縛』（新潮選書）。

個人ブログ「中東・イスラーム学の風姿花伝」(<http://ikeuchisatoshi.com/>)でも情報発信中。

2. ムハンマド皇太子の提唱する「1979年以前のサウジアラビア」

1979年がサウジアラビア，そして中東全体の歴史にとって，重大事件・事象が相次いだ年であることは，衆目の一致するところである。しかし，そのことと，「1979年以前にサウジアラビアの宗教解釈と実践は穏健で開明的だった」と議論することの間には，大きな飛躍がある。

この飛躍を含んだ論理を，公的な領域で展開し，サウジアラビアの将来をめぐる議論の基軸として定着させたのは，ムハンマド皇太子自身の発言だった。ムハンマド皇太子はサウジアラビアの1979年以後の宗教解釈と実践が「異常」であるとすら言明し，「1979年以前の穏健なイスラーム教解釈」に戻すことで，厳格・保守的でテロリストも多く生み出してきたサウジアラビアの宗教改革が可能であると，近年繰り返し発言している。その中で，特に重要な二つの発言を特定しよう。

第一は，2017年10月23日に開かれた「未来投資イニシアティブ（Future Investment Initiative）」の会議の場での発言である。第二は，2018年3月から4月にかけての訪米に先立って収録され，3月18日に放送された，米CBSテレビの「60ミニッツ」のインタビューである。

(1) 2017年10月23日「未来投資イニシアティブ」での発言

公の場でムハンマド皇太子が「1979年以前のサウジアラビア」への回帰を自ら強く唱道したほぼ最初の事例と見られるのが，2017年10月23日にリヤドのリッツ・カールトン・ホテルで行われた「未来投資イニシアティブ・サミット」における発言である。ムハンマド皇太子は，EUのフェデリカ・モゲリーニ EU 外務・安全保障政策上級代表や，孫正義ソフトバンク会長らと共にパネルディスカッションに登壇したが，そこで紅海岸の巨大プロジェクト NEOM を発表するとともに，「1979年以前のサウジアラビア」への回帰を提唱した⁽¹⁾。

そこでムハンマド皇太子は「われわれは以前の姿，つまり穏健なイスラーム教の国で，全ての宗教に開かれ，世界に開かれた国へと戻る」と述べた。そして「われわれはこれからの30年間のわれわれの人生を，破壊的な考え方に対処して費やしなどはしません。われわれは今日，破壊的な考え方を破壊します。サウジアラビアは，1979年以前は，こんな具合ではなかったのです。われわれは以前の姿，つまり穏健なイスラーム教を信じ，すべての宗教に開かれた姿に戻るのです。われわれは普通の生活をして，世界と共存し，世界に

(1) “Saudi's Mohammed bin Salman promises return to 'moderate open Islam',” *The National*, October 24, 2017 (<https://www.thenational.ae/world/gcc/saudi-s-mohammed-bin-salman-promises-return-to-moderate-open-islam-1.669974>).

貢献したい」と述べたと伝えられている。

ムハンマド皇太子はこの会議に際して、リヤドでガーディアン紙のインタビューに応じており、そこでも、パネルディスカッションでの発言と同様の内容を、より詳細・厳密に語っている⁽²⁾。ここでも「1979年以前のサウジアラビア」が穏健で開放的であったと論じ、その時代への回帰によって、サウジアラビアで大きな宗教改革が比較的容易に実行されることを示唆し、それにより経済改革の成功の可能性が高まることを含意している。

(2) 米 CBS 「60ミニッツ」インタビュー

「未来投資イニシアティブ」でムハンマド皇太子が行った「1979年以前のサウジアラビア」が波紋を呼び、注目を集めていった後に、ムハンマド皇太子は改めてこの問題に正面から触れている。ムハンマド皇太子は2018年3月－4月にかけて長期間にわたる訪米を行ったが、これに先立つ3月初頭、米CBSテレビの看板番組「60ミニッツ」のインタビューに答えており⁽³⁾、3月18日に放送された。翌19日にムハンマド皇太子が米国に到着し、3月20日にトランプ大統領との会談を行うというタイミングで、全米に向けて放送され、世界に伝えられたムハンマド皇太子の「60ミニッツ」インタビューは、サウジアラビアのPR戦略の規模の大きさを感じさせる。このインタビューで、ムハンマド皇太子の「1979年以前のサウジアラビア」に関する議論は、より詳細に展開されている。直接関係する部分を、インタビューが掲載されたCBSのウェブサイトから引用し、訳出しておこう⁽⁴⁾。

このインタビューでは、ムハンマド皇太子を若い改革者として肯定的に描き、ムハンマド皇太子の言い分を、強い批判や検証を加えることなくそのまま流しているが、若干の批判的視点を交える部分がある。それは、女性の解放や、芸術・文化の自由化、汚職の追放といったムハンマド皇太子の掲げる政策が本当に可能なのかという疑問を、控えめながら、提起する場面である。ここでインタビュアーのノーラ・オドネルは、サウジ人が主体になって9・11事件を実行したことについて、見解を求める。

オドネル：アメリカ人がサウジアラビアについて思い浮かべる時、ウサーマ・ビン・ラーディンと9・11事件を思い浮かべるのです。ビン・ラーディンがアメリカの地に

(2) “I will return Saudi Arabia to moderate Islam, says crown prince” *The Guardian*, October 24, 2017 (<https://www.theguardian.com/world/2017/oct/24/i-will-return-saudi-arabia-moderate-islam-crown-prince>).

(3) “Saudi crown prince gives first U.S. TV interview to Norah O'Donnell for “60 Minutes”,” CBS This Morning, March 7, 2018 (<https://www.cbsnews.com/news/saudi-arabia-crown-prince-mohammed-bin-salman-60-minutes-norah-odonnell/>).

(4) “Saudi Arabia's heir to the throne talks to 60 Minutes,” 60 Minutes, March 19, 2018 (<https://www.cbsnews.com/news/saudi-crown-prince-talks-to-60-minutes/>).

持ち込んだテロリズムを思い浮かべるのです。

ムハンマド皇太子：よろしい。ウサーマ・ビン・ラーディンは15人のサウジ人を9・11の攻撃にリクルートしました。目的ははっきりしていました。CIAの文書と議会の調査によれば、ウサーマ・ビン・ラーディンは中東と西洋の間に分裂を生じさせたかったのです。サウジアラビアと米国との間にね。

オドネル：なぜウサーマ・ビン・ラーディンは西洋とサウジアラビアの間に憎しみを生もうとしたのですか？

ムハンマド皇太子：リクルートに都合の良い環境を作るためにね。そして、西洋がイスラーム世界を破壊しようとしているぞ、という彼の過激なメッセージを広めるためにです。実際に、彼は中東と西洋に分裂を生むことに成功しました。

オドネル：では、あなたはどのようにしてこれを変えますか。なぜならば、あなたがやろうとしていることは、このサウジアラビアのやり方を変えることに見えるからです。

ムハンマド皇太子：その通り。われわれは過去3年間で、多くの点で成功していると思うよ。

9・11事件へのサウジの責任について、このように非常にやんわりとした形で質した後、インタビュアーは、サウジアラビアで支配的な、厳格な宗教解釈と実践を変えることは困難ではないのか、と問いかける。「1979年以前のサウジアラビア」という概念は、それに対するムハンマド皇太子の返答という形で示される。

オドネル：アラビア半島で実践されているタイプのイスラーム教は、過酷で、厳格で、不寛容である、という印象が広まっています。これはある程度は真実なのですか？

ムハンマド皇太子：1979年以後は、それは真実です。われわれは犠牲者なのです。特に私の世代は大いに被害を被ってきました。

オドネル：過去40年間のサウジアラビアは何だったのですか？それは本当のサウジアラビアなのですか？

ムハンマド皇太子：全くそんなことはありません。これは本当のサウジアラビアではない。私は視聴者たちにお願ひする。スマートフォンを使って調べてみてくれと。グーグルで1970年代、60年代のサウジアラビアについて検索してみてください。そうすれば、本当のサウジアラビアを、簡単に写真で見られますよ。

オドネル：1979年以前のサウジアラビアとは何なのですか？

ムハンマド皇太子：われわれは非常に普通の生活をしていました。他の湾岸の国と似たようなものでした。女性は車を運転していました。サウジアラビアに映画館もあったのですよ。どこにでも働いている女性がいました。われわれは単なる普通の人間として、他のどの国とも同じように、発展していたのです。1979年の出来事まではね。

サウジの女性は、これまで公の場に姿を見せませんでした。新しく権利を与えられてきています。起業するのが容易になるように、軍に入れるように、コンサートやスポーツのイベントに参加できるように。6月には、女性たちはハンドルを握って運転できるようになります。

オドネル：女性は男性と平等ですか？

ムハンマド皇太子：全く平等です。われわれは全て人間で、違いはありません。

オドネル：あなたは言いました。「サウジアラビアをかつてのわれわれの、穏健なイスラム教に戻す」と。これは何を意味するのですか？

ムハンマド皇太子：男性と女性が混ざることを禁じ、男と女が職場を共にすることを認められない過激派がいます。それらの考え方の多くは、預言者とカリフの時代の生活のあり方と矛盾しているのです。預言者とカリフの時代こそが、真の範例であり、本当のモデルです。

ムハンマド皇太子はインタビューで次のようにも述べている。「法は非常に明快に、シャリーアの法に規定されています。女性は慎ましい、尊重される服装をしなければならない、男性と同じように、と。しかしこれは、特に黒いアバヤや黒いスカーフを定めてはいません。どのような慎ましく尊重される服装を選んで着るか、決定は全て女性に委ねられているのです」。

このようなムハンマド皇太子の発言を、CBSは次のように解釈していく。「皇太子はサ

ウジアラビアの問題を、1979年まで辿る。この年、隣国イランでアーヤトッラー・ホメイニーがイスラーム教の神政政治を樹立した。同じ年、サウジアラビアの宗教過激派がイスラーム教の最重要の聖地、メッカの大モスクを占拠した。国民の中の宗教過激派をなだめるために、サウジ政府は弾圧を始め、日々の生活から女性を隔離し始めた。

このように、CBSの報道は、ムハンマド皇太子のインタビューの含意を、あたかも忖度するように深く読み込み、次のような印象を与えていく。すなわち、9・11のテロリストの輩出や、女性の人権を制限する国内社会の法制度・慣習など、米国で評判の悪いサウジアラビアの側面は、1979年以降に導入されたものであって、本来のサウジアラビアのものではない。1979年以前に回帰することで、否定的な側面は容易に払拭されうる。サウジ国内の過激派だけでなく、イラン革命が、サウジを宗教的に厳格化させた原因であり、イランにも責任がある。このように、ムハンマド皇太子のインタビューは、サウジの抱える困難がそれほど根深いものではなく、原因・責任が少なくとも一部はイランにあるという印象を、視る者に与えるようになっている。

3. 賛否の論戦

ムハンマド皇太子の「1979年以前のサウジアラビア」論は、一方でサウジ系のメディアや、ムハンマド皇太子に好意的な欧米のメディア・有力論客によって、大々的に宣伝され、流布していく。同時に、この議論に対する批判も提起されるようになっていく。ここでは肯定的な報道として、サウジ系のメディアによる報じ方と共に、この議論が欧米でも広まり、説得力をもって受け止められるのに大きな役割を果たした、『ニューヨーク・タイムズ』紙のトマス・フリードマンの論調を見ておこう。また、サウジの体制批判を強める論客による反応も、いくつか紹介しておこう。

(1) サウジ系メディアでの礼賛

まず、サウジ系のメディアでは、ムハンマド皇太子が2017年10月23日に「未来投資イニシアティブ・サミット」で「1979年以前のサウジアラビア」への回帰を宣言して以来、ムハンマド皇太子の発言を支持する報道が多く続いている。例えばサウジ資本の国際衛星放送局アル・アラビーヤの英語版ウェブサイトに掲載されたコラムや記事から、サンプルを拾ってみよう。10月27日付の記事では、1979年以前にはサウジではオーケストラが活躍し、女性の歌手すらいたのだ、と論じる⁽⁵⁾。10月29日付のマモドゥーフ・アル・ムハイニーによるコラムは、ムハンマド皇太子の発言を引いて賛同の意を表した上で、2017年を

(5) “1979, the year that changed arts and culture in Saudi Arabia,” *Al-Arabiya*, 27 October 2017 (<http://english.alarabiya.net/en/perspective/features/2017/10/27/1979-the-year-that-changed-arts-and-culture-in-Saudi-Arabia.html>).

新たな出発点とするサウジが、1979年以前の歴史と文化を土台にすることで、日本やシンガポールのような近代化が可能になる、と期待を高めていく。ムハイニーによれば、「1979年以前は、教育カリキュラムは開放性と、共存、独立した思考を促していた。ところがサフワ（覚醒）運動の説教師や、ムスリム同胞団がこの啓蒙的な教育の精神を攻撃し、破壊してしまい、憎しみと死を唆す文化で置き換えてしまったのだ」という。ここではサウジ発の復古主義的な宗教思想潮流の「覚醒」運動と、エジプトから流入したムスリム同胞団が「1979年以前」の啓蒙的な教育・文化を破壊した張本人とされる。コラムでは次のようにも論じる。「1979年以前の文化は、穏健に宗教的であり、生命と未来に対して開かれていた。それは社会に入り込み拡大しようとする過激主義の教義を拒否した。しかし、この寛容の文化は消滅し、憎しみの文化が広がった」⁽⁶⁾。

11月7日のサウジの英字紙『アラブ・ニュース』のマハー・アキールのコラムでも、ムハンマド皇太子の「未来投資イニシアティブ・サミット」での発言を長く引き写した上で、サウジは1979年以来「30年にわたり意識不明」だったと論じ、ムハンマド皇太子によってサウジアラビアは目覚めさせられようとしているのだ、と礼賛する⁽⁷⁾。

(2) トマス・フリードマンと『ニューヨーク・タイムズ』による宣布

これらのサウジ系のメディアによる、ムハンマド皇太子の「1979年以前のサウジアラビア」論への呼応は、サウジアラビアの内部では一定の影響力をもちうるが、国際的な広がりには限界がある。「1979年以前のサウジアラビア」という概念が急速にサウジアラビアの外でも広がり、国際社会のサウジ論の基調となる過程では、欧米の主要メディアの介在が不可欠であった。特に、『ニューヨーク・タイムズ』紙のコラムニストであるトマス・フリードマンが、ムハンマド皇太子やサウジ王室との個人的な深い関係を誇示しながら、繰り返し「1979年以前のサウジアラビア」に言及し、議論を敷衍し続けたことが、この概念の普及を促進したと言えよう。フリードマンによるこの概念への言及と、「宣伝」と言ってもいいほどの肯定的・積極的な評価を含むコラムを、以下に4つ挙げておこう。

ムハンマド皇太子のリヤドでの発言を受けて、2017年11月7日のコラムで、フリードマンは

「ムハンマド皇太子は政権の正統性の根拠をシフトさせ、『1979年の時代』を終わらせようとしている。1979年に、イスラーム教の最も聖なる場所であるメッカが、サウド家が十

(6) Mamdouh AlMuhaini, “Saudi Arabia, before 1979 and after 2017,” *Al-Arabiya*, 29 October 2017 (<http://english.alarabiya.net/en/views/news/2017/10/29/Saudi-Arabia-before-1979-and-after-2017.html>).

(7) Maha Akeel, “After 30 years in a coma, the real Saudi ‘awakening’ begins now,” *Arab News*, November 7, 2017 (<http://www.arabnews.com/node/1189856>).

分にイスラーム的ではないと主張するサウジの超原理主義者の説教師によって占拠された後、サウジの支配一家は宗教的な正統性を押し上げるために、国内では急激に宗教へと傾斜した。ピューリタンのスナ派のワッハーブ派を外国に輸出し、モスクや学院をロンドンやインドネシアに建立した⁽⁸⁾と記している。

フリードマンは2017年11月23日付のコラムでは、この月の初頭に、リヤドのリッツ・カールトン・ホテルに王族や閣僚や起業家を大量に拘束し、汚職を追及した事件が発生したことを踏まえて、次のように記す。「反腐敗運動の推進は、ムハンマド皇太子が打ち出した異例で重要なイニシアティブのうち、二番目のものに過ぎない。第一に重要なのは、サウジのイスラーム教をより開かれた近代的な志向性のものへと戻すイニシアティブだ。1979年にそこから踏み外したのだ。ムハンマド皇太子が、最近のグローバルな投資会議で描写したように、『穏健で、バランスが取れたイスラーム教』に戻るのであり、それは世界に開かれた、全ての宗教と伝統と人々に開かれたものだ⁽⁹⁾。ここでフリードマンはリッツ・カールトン・ホテルへの軟禁事件になんら疑義を呈さないだけでなく、それどころかムハンマド皇太子の「1979年以前のサウジアラビア」発言を再度取り上げて、さらに力を込めて絶賛するのである。

2017年の暮れの12月28日から、2018年の年頭にかけて、イランの各地で政権批判のデモが発生した。するとフリードマンは2018年1月9日付のコラムでこれを取り上げるのだが、フリードマンはイランのデモすらも、ムハンマド皇太子の「1979年以前」に戻ろうという主張と共通のものとして論じてしまう。「イランとサウジの若者は1979年を葬ろうと試みる」と題したコラムでフリードマンは「イランの最近の抗議行動に関する最大の問いは——最近のサウジアラビアで宗教的な規制が取り払われたことと一緒に——これらが合わさって、1979年にムスリムの世界がピューリタンの強硬右派へと舵を切ったことの終わりの始まりとなるかどうかである」と主張する。イランとサウジアラビアは、人口の過半数が30歳以下の若者であるということで共通しており、SNSとスマートフォンでつながっていることも同じだという。イランとサウジの若者たちはいずれも、腐敗した聖職者たちに古い生き方を強制されることに我慢ができなくなっており、「1979年とそれがもたらした全てを葬りたいと思っているのだ」と断定する⁽¹⁰⁾。イランの、内実が明らかではないデモの発生すらも、ムハンマド皇太子のイニシアティブと結びつけてしまうのは、なかなか

(8) Thomas L. Friedman, “Attention: Saudi Prince in a Hurry,” *The New York Times*, November 7, 2017 (<https://www.nytimes.com/2017/11/07/opinion/saudi-prince-reform-coup.html>).

(9) Thomas L. Friedman, “Saudi Arabia’s Arab Spring, at Last: The crown prince has big plans for his society,” *The New York Times*, November 23, 2017 (<https://www.nytimes.com/2017/11/23/opinion/saudi-prince-mbs-arab-spring.html>).

(10) Thomas L. Friedman, “Iranian and Saudi Youth Try to Bury 1979,” *The New York Times*, January 9, 2018 (<https://www.nytimes.com/2018/01/09/opinion/iran-saudi-youth-1979.html>).

アクロバティックな飛躍を含む連想と言えるだろう。

ムハンマド皇太子の訪米に先立つ2018年3月6日付のコラムで、フリードマンは、1979年をきっかけにサウジが宗教解釈を急転換したという主張をまたも繰り返している。ムハンマド皇太子の発言を踏襲して、1979年以後にサウジの宗教文化は一変したと主張し「サウジは全ての映画館を閉鎖し、コンサートと娯楽を禁じ、女性のエンパワーメントへの潮流を圧殺し、多元主義に反した、女性蔑視的な、反西洋的なイスラーム教解釈を広めたのだ。それが9・11事件と「イスラーム国」とアル＝カーイダとターリバーンを生んだのだ」と、サウジに関するあらゆる悪が、あたかもイラン革命とメッカのアル＝ハラーム・モスク占拠事件への反動で生じた歴史の浅いものであるかのように断定する。そして「しかしわれわれは今や、ただ語るだけでなく、実際に女性の運転の禁を解き、女性が西洋やアラブのロックスターのコンサートにいくことを許可し、女性が軍に入り、より簡単に起業することを許可し、宗教警察と聖職者の権力を大幅に削減する、サウジの指導者を得たのだ」とムハンマド皇太子を手放しで絶賛する⁽¹¹⁾。

以前からも、フリードマンは、『ニューヨーク・タイムズ』紙のコラム欄を用いて、繰り返シムハンマド皇太子を大胆な改革者として描いてきているが、リヤドの投資会議でのムハンマド皇太子の「1979年以前のサウジアラビアへの回帰」をめぐる発信を「きっかけ」として、イラン革命とイスラーム過激派の台頭が諸悪の根源であって、それさえなければサウジは自由で開放的で寛容な、女性の権利が守られた理想的世界であった、と繰り返シ発信し、サウジアラビアの改革に関する国際的な議論の新たな基調を定めたと言えよう。ムハンマド皇太子の「1979年以前のサウジアラビア」に関する議論は、フリードマンの強力な後押しによって、世界に広められていったのである。

(3) 批判

これに対して、欧米メディアや、サウジと対立するカタール系のメディアには、ムハンマド皇太子の発言や施策に対する批判的な論調も現れている。「1979年以前のサウジアラビア」の議論に対する批判には、大まかに分類すると三種類の要素がある。第一は、歴史認識の歪みと歴史修正主義的な傾向への批判である。1979年以前のサウジアラビアの宗教と社会を、実際以上に自由で開放的なものとして描き、あたかも容易にそこに戻れるかのように議論するムハンマド皇太子の論法が批判される。第二は、1979年以降のサウジが行ってきた過激派支援の政策への反省や批判が見られない点への批判（あるいは揶揄）である。第三は、1979年以前の穏健で自由な宗教解釈に回帰するというムハンマド皇太子の主

(11) Thomas L. Friedman, “Memo to the President on Saudi Arabia,” *The New York Times*, March 6, 2018 (<https://www.nytimes.com/2018/03/06/opinion/trump-saudi-arabia-mbs.html>).

張には一定程度賛成しようとしても、実際にムハンマド皇太子が現在行っている政策が新たな抑圧を生んでいることへの批判である。

ここでは批判の論調のサンプルを二つ挙げておこう。第一は、ロンドン大学でサウジ社会・政治を講じる著名な研究者で、サウド家の支配に対する強い批判の姿勢で知られるマアダウィー・ラシードによるものである。ラシードは2017年11月10日付の『ニューヨーク・タイムズ』紙にコラムを寄稿し、前月に行われていた「ムハンマド皇太子の、1979年以前のサウジの宗教の穏健さについての大雑把で不正確なコメント」を批判した上で「もし彼が、この国に穏健なイスラーム教を受け入れさせようと真剣に考えているなら、サウジの聖職者や異なる考えを持つ思想家に、イスラーム教の根本的なテキストや規範について開かれた環境で議論させなければならない」。しかし実際にはサウジでは宗教に関する議論は制限されており、異なる意見を持つ者たちが次々に「テロリズム」の科で投獄されている、と批判する⁽¹²⁾。

「60ミニッツ」のインタビューに対しては、サウジの有力なジャーナリストで、かつては政府系だったが、近年政府への批判を強め、国外に拠点を移しているジャマール・カシヨギ(ハーショグジー)が、4月3日に批判のコラムを『ワシントン・ポスト』紙に寄稿した。

カシヨギは自らが10代だった1970年代のサウジアラビアのメディナでの生活を回想し、「私の1979年以前の記憶は(中略)32歳の皇太子が西洋の聴衆に差し出すものとは全く異なっている」と記す。当時もサウジの女性は車を運転しておらず、カシヨギは1976年に米国に住んでいた姉妹を訪問した時に初めて女性が運転しているのを見たという。また、当時のサウジの映画館は非公式な掘っ建て小屋で、壁に映写していた。見張りが立って宗教警察が近づくと警告した。取り締まりから逃れるためにカシヨギの友人は塀から飛び降りて足を骨折した。1970年代に女性が運転できたのはクウェートとバーレーンだけだったという。そしてカシヨギは、1970年代のサウジがある程度開放的であったとすれば、それは厳格なワッハーブ派や「覚醒」の潮流を抑えるために、ムスリム同胞団の改革思想を取り入れたことによる、と論じ、ムハンマド皇太子の統治では、ムスリム同胞団が弾圧されていることに異を唱える。1979年以前より寛容な解釈に戻るということに、カシヨギも反対ではないという。しかしこれまでに蔓延していた宗教的不寛容を、異論を排除する圧政で置き換えても問題は解決しない、というのがカシヨギの批判である⁽¹³⁾。

(12) Madawi al-Rasheed, “Can the Saudi Crown Prince Transform the Kingdom?” *The New York Times*, November 10, 2017 (<https://www.nytimes.com/2017/11/10/opinion/mohammed-bin-salman-saudi-arabia.html>).

(13) Jamal Khashoggi, “By blaming 1979 for Saudi Arabia’s problems, the crown prince is peddling revisionist history,” *The Washington Post*, April 3, 2018 (<https://www.washingtonpost.com/news/global-opinions/wp/2018/04/03/by-blaming-1979-for-saudi-arabias-problems-the-crown-prince-is-peddling-revisionist-history/>).

結びに

「1979年以前のサウジアラビア」への回帰という議論の提起は、戦略的広報の観点からは、一定の成功を収めたと言えよう。ムハンマド皇太子が掲げる大胆で大規模な改革の実行可能性への疑念が完全には払拭できない中、肯定的な見通しを打ち出すために、有効な言説だったと言えよう。ムハンマド皇太子自らがこれを華やかな国際会議の場で発信し、欧米主要メディアを通じて拡散させ、有力コラムニストのお墨付きを得るといった戦略的なPRの手段を尽くしたことで、この概念はかなり広く流通するようになった。しかし1979年以前のサウジアラビアの宗教解釈と実践が、その後と全く異なるものであり、サウジの生活が現在と異なり自由で開放的、男女の平等に基づくものであったとまで議論することは、おそらく歴史の事実と異なり、現在の政治的な思惑から過去の記憶を改変する歴史修正主義の誹りを免れない。しかし「1979年以前のサウジアラビア」という言説は、ムハンマド皇太子の主導による改革を正当化し、その実現可能性を高く評価するために必須の要素となりかけており、今後もこの言説の流通は続くと思われる。1979年以前の宗教と社会の寛容性や開放性を、歴史事実という点では必ずしも裏付けられていないとはいえ、繰り返し主張し、ムハンマド皇太子自らが主導して政策に結びつけていくことで、「1979年以前のサウジアラビア」を理想化しそこへの回帰を主張する議論は、「自己実現的予言」となり、サウジの宗教と社会を変化させる触媒となる可能性も、全く否定はできない。

* 本稿の内容は執筆者の個人的見解であり、中東協力センターとしての見解でないことをお断りします。